

闘病記

さいたま市見沼区

安藤三郎（東本町三丁目出身）

計算業務の迅速化を目指して電算機の勉強を始めたのが昭和四十年暮、直訳的な説明書があるだけであれこれ悩むうちにその為か、胃が変になり吐気の連続と



なった。両親の法要で帰省の帰り義兄の所で精密検査を受け胃潰瘍と診断され、即刻入院となった。所が病室が満員だった。すると精神科医の義兄が俺の所の個室があると云う。その病棟は入る時は自由だが出る時は責任者の解錠が必要で、病室はドアが廊下側への外開き、窓は鉄の縦格子であった。

入院一日目は寝具を整えに来た女の子にどこが悪いかと聞かれたから、胃潰瘍と答えると「ヤツバリ」と云うような顔をされた。二日目は掃除の小母さんが入って来るなり「そんなに思いつめてると余計悪くなる」と云う。三日目はこの小母さんに「昨日は失礼しました」と頭を下げられた。小母さんはこの人もヤツバリ障害を自覚していないと思つたから、二日目の一件のあと状況をナースセンターに報告して、事情を知らされたのである。

ここでは胃潰瘍は通用しないからと気付き積極的に融け込んだ方が肩も凝らぬと諦め、皆が集まるTV、麻雀などのあるホールへ出掛けた。時々洗濯したガーゼなどを畳む作業があった。やり方を教えて貰いやって居ると患者のオーさんが違うと云い手本を見せてくれた。所が全く同じだったが逆らわず作業を続けて居たら、「安藤さんは紙一重だ」と褒められた。やがて私はその患者でないらしいと一部の人に判つたらしい。理由は診察に見える医師と持参する注射などは、今迄この病棟では見た事がないという。良く観察していると敬服した。

私の病状はひたすら眠り十日程で便の色が黒から黄に変わりそれにつれて食欲も回復して来た。手術なら同じ太さとなる食道と十二指腸を縫合する胃の全摘出だったとの事だが、三週間程で退院となった。皆に挨拶したらおかしくなった。皆に又おいでと云われ、六ヶ月後の検診の時又悪くなったかと歓迎された。逆境にある時気取らず流れに委せると意外に楽になる事を教えられた体験でもあった。

